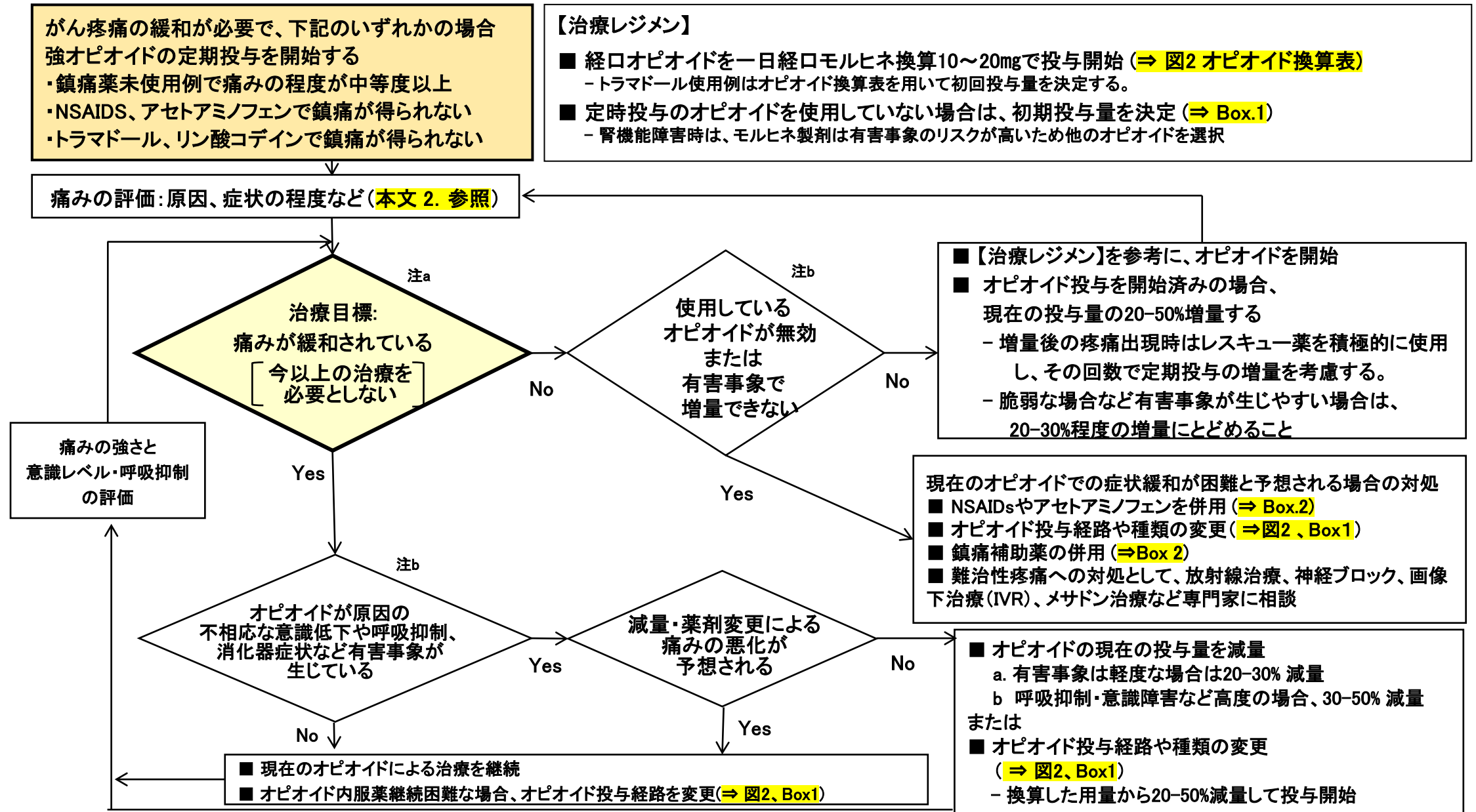


# オピオイドによるがん疼痛治療アルゴリズム ver 1.0



**痛みが強く、即時の対応が必要な際には、オピオイドレスキュー薬の繰り返し投与をおこなう(60分おいて繰り返し使用可能) 注c**

注a: 除痛(痛みがない状態)が望ましいが、急激な薬剤の調整により有害事象が問題になる場合があります。症状緩和の程度と薬剤の有害事象のバランスを鑑みる必要があります。

治療を開始する段階で、症状緩和治療の第一段階の目標設定を行うこと(本文 2. 参照)

治療中も痛みの有無だけを質問するのではなく、痛みの程度や有害事象の状況などを評価する必要があります(本文 4. 参照)

注b: オピオイドによる眠気、呼吸数低下(10回/分未満)、活動性せん妄、ミオクローヌス、悪心/嘔吐といった有害事象への治療(対症療法、オピオイド減量など)は適宜行う

注c: レスキュー薬の効果が乏しいときには、呼吸抑制や眠気、悪心など有害事象の発生に注意しながらレスキュー薬の用量を増量してもよい